調査報告

「小城藩日記データベース」について

伊藤昭弘

はじめに

地域学歴史文化研究センターでは、平成二八年度より「小城藩日記データベース」構築研究を開始した。本研究は同年の国立歴史民俗博物館「総合資料学奨励研究」に採用され、研究費および技術的な支援を同館より得ながらすすめている。本稿では、このデータベースの目的・構造・課題について、二八年度の作業から得た成果・経験をもとに記す。

一　データベースの目的

筆者は佐賀藩のほか、これまでいくつかの藩を研究対象としてきたが、特に萩藩・松代藩の「毛利家文庫」「松代藩真田家文書」など藩政史料の圧倒的な質・量に恵まれ、成果を出すことができた。これはあくまで筆者の印象だが、萩藩においては特定の内容・事項についてまとめたいわゆる「一件物」、松代藩は「勘定方」など藩政部局ごとにまとめられた日記・記録類が豊富で、筆者が専門とする藩財政にかんする史料を捜す際、非常にスムーズだった記憶がある。

対して佐賀藩の「鍋島家文庫」などは、藩財政については詳細な帳簿があってまたもや筆者は恵まれたものの、ざっとみたかぎり「一件物」や藩政部局の記録類は少ない（といっても、比較対象が萩藩・松代藩ではあるが）代わりに、給人層の日記が非常に多い。

佐賀藩の給人は、その最上位から順に三家・親類・親類同格・家老・着座・侍・手明鑓・徒・足軽と構成されている。三家は初代藩主鍋島勝茂の子・元茂（小城鍋島家）・直澄（蓮池鍋島家）・直朝（鹿島鍋島家）が興し、幕府の軍役を果たすなど大名としての側面を持ちつつ、あくまで佐賀藩主のもとにある、いわゆる「内分支藩」である。親類はやはり勝茂の子・直弘が興した白石鍋島家、中世以来の肥前の名家・神代家に勝茂の子・直長が養子に入った川久保鍋島家、もともと鍋島家の主君である龍造寺政家の子・村田安良のもとに、白石鍋島家・直弘の子・政辰が養子に入り、さらにその後を佐賀藩二代藩主光茂の子・政盛が継いだ村田家、直長の子・茂英（光茂養子）が興した村田鍋島家で構成される。三家・親類は、基本的には佐賀藩政にかかわらなかった（親類は、例外あり）。

親類同格は、龍造寺家の流れをくむ諫早家・多久家・武雄鍋島家・須古鍋島家の四家からなる。佐賀藩の当役（いわゆる筆頭家老に相当）はこの四家から出され、藩政の中心を担った。以上三家・親類・親類同格は「大配分」と称され、それ以下の「小配分」に比べて給地高が大きく、かつまとまりをもっていた。続く家老（七家）・着座（時期により変動）は藩政の

要職をつとめたほか、大組頭として佐賀藩軍制における「組」を統率した。

以上のいわゆる「上級家臣」の家々には、多くの日記が伝存している。管見のかぎり、三家はすべて、親類のうち白石鍋島家、親類同格は須古鍋島家以外の三家、家老・着座では深堀鍋島家・神代鍋島家・倉町鍋島家・納富鍋島家など、いずれも一年に一冊から複数冊、長期間にわたっている。当然ながら研究者にとっては「宝の山」であり、筆者もたとえば以前佐賀藩の藩札である「米筈」について検討した際[1]には蓮池鍋島家の日記を全冊読み、幕末における給人たちの小銃調達を調べた際[2]には前記各家の日記のうち当該時期のものに目をとおした。

筆者のように佐賀藩研究をほぼ「専業」とし、かつ佐賀県立図書館など史料の原本や複製本を多く所蔵している機関の近くに住んでいる者にとっては、こうした日記に没頭することは容易である。たとえば前述のような特定テーマを調べるために日記に目をとおし、目的に沿う記事が見つからなくても、佐賀藩にかんするさまざまな情報に接すること自体が自身のプラスになるし、新しいアイデアの源泉になることもある。また、ある程度時期を絞っていたら、当該時期のものを数度の調査でまとめて目をとおす、といったこともできるだろう。

しかしながら、たとえば藩政史に興味があるとか、出身地である佐賀をテーマに卒業論文を書きたいと考えている、また何らかのテーマでいろいろな地域の事例を検討している研究者にとって、日記はかなりハードルが高いのではないか。前述の「一件物」が比較的多ければ、それぞれの関心にそったタイトルの史料を調査できる（なければ、とりあえずあきらめがつく）。日記の場合、かなりの労力を費やさなければ、欲しい記事の有無すら確認できない。

佐賀大学、および地域学歴史文化研究センターは、多くの研究者が佐賀をフィールドとし、研究が進展することを望んでいる。そのハードルを下げるための手段のひとつとして、「小城藩日記データベース」は発想している。前述のとおり大量に伝存している給人層の日記のうち、管見のかぎり佐賀大学附属図書館所蔵小城鍋島文庫の（通称）「小城藩日記」は、唯一その記事目録である「日記目録」が、藩政時代に作成されている。その画像は同館ウェブサイトで閲覧可能（http://www.dl.saga-u.ac.jp/OgiNabesima/nikkimoku.htm）だが、さらに一歩すすめて記事をデータベース化することにより、近世佐賀に関心を持った方が興味のあるキーワード・分類項目によって検索し、面白そうな記事を捜し出す。そして「小城藩日記」の閲覧を考えたり（将来的には、本データベース内で「小城藩日記」の画像も閲覧できるようにしたい）、他の給人層の日記を閲覧する（たとえば蓮池鍋島家の日記は、佐賀県立図書館ウェブサイト（http://www.sagalibdb.jp/komonjo/php/KomonjoSeek.phpで、「請役所日記」で検索）で閲覧できる。）など、佐賀（藩）研究に足を踏み入れるきっかけとしてもらいたい。

二　データベースの構造

小城鍋島文庫の「小城藩日記」と「日記目録」は、表1のとおり現在伝存している。どちらか片方のみ残っている年も多いが、当面は「日記目録」をもとに、データベースを作成する。

データベースの構造は、表2のとおりである。和暦は「日記目録」の記述どおりとし、西暦はとりあえず和暦とのズレまでは考慮していない。記事内容は、「日記目録」の記述をそのまま翻刻したものである。また日記の

表１　「小城藩日記」「日記目録」「寺社方抜書」伝存状況

西暦	和暦	日記	日記目録	寺社方抜書
1661	万治４		７～閏８月	
	寛文１			
1677	延宝５		２月～	
1678	延宝６		１～８月	
1679	延宝７			
1680	延宝８		６～８月	
1681	延宝９			
	天和１			
1682	天和２	４～９月	５～９月	
1683	天和３		１～閏５月	
1684	天和４	６月～	６月～	
	貞享１			
1685	貞享２	○	○	
1686	貞享３		○	
1687	貞享４		２月～	
1688	貞享５		○	
	元禄１			
1689	元禄２		○	
1690	元禄３		○	
1691	元禄４		１～９月	
1692	元禄５		○	
1693	元禄６		１～10月	
1694	元禄７		○	
1706	宝永３	○		
1707	宝永４	○		
1708	宝永５			
1709	宝永６			
1710	宝永７	○		
1711	宝永８	○		
	正徳１			
1712	正徳２	５～８月	○	
1713	正徳３		１～11月	
1714	正徳４		１～７月	
1715	正徳５		○	
1716	正徳６		○	
	享保１			
1717	享保２		○	
1718	享保３			
1719	享保４		○	
1720	享保５		○	
1721	享保６		○	
1722	享保７		○	
1723	享保８		○	
1724	享保９		○	
1725	享保10		○	
1726	享保11		○	
1727	享保12		○	
1728	享保13		○	
1729	享保14		○	
1730	享保15		○	
1731	享保16		○	
1732	享保17		○	
1733	享保18		○	
1734	享保19		○	
1735	享保20		○	
1736	享保21		○	
	元文１			
1737	元文２		○	
1738	元文３		○	
1739	元文４		○	
1740	元文５		○	
1741	元文６		○	
	寛保１			

西暦	和暦	日記	日記目録	寺社方抜書
1753	宝暦３		○	
1754	宝暦４		○	
1755	宝暦５	○	○	
1756	宝暦６		○	
1757	宝暦７	○	○	
1758	宝暦８	○	○	
1759	宝暦９		○	
1760	宝暦10		○	
1761	宝暦11		○	
1762	宝暦12		８～12月	
1763	宝暦13	○	○	
1764	宝暦14		○	
	明和１			
1765	明和２	○	○	
1766	明和３	○	○	
1767	明和４	○	○	
1768	明和５	○		
1769	明和６	○		
1770	明和７	○		
1771	明和８	○	○	
1772	明和９	○	○	
	安永１			
1773	安永２	○		
1774	安永３	○		
1775	安永４	○		
1776	安永５	○		○（文化１まで）
1777	安永６			
1778	安永７		３～８月	
1779	安永８	○	２～11月	
1780	安永９			
1781	安永10		３月～	
	天明１			
1782	天明２	○	○	
1783	天明３	○	○	
1784	天明４		○	
1785	天明５		○	
1786	天明６		○	
1787	天明７		○	
1788	天明８		○	
1789	天明９	○		
	寛政１			
1790	寛政２	○		○（安永５より）
1791	寛政３	○	○	
1792	寛政４	○	○	
1793	寛政５	○	○	
1794	寛政６	○	○	
1795	寛政７	○	○	
1796	寛政８	○	○	
1797	寛政９	○	○	
1798	寛政10	○	○	
1799	寛政11	○	１～８月	
1800	寛政12	○	３月～	
1801	寛政13	○	○	
	享和１			
1802	享和２		○	
1803	享和３		○	
1804	享和４		○	
	文化１			
1805	文化２	○	○	○
1806	文化３	○	○	
1807	文化４	○	○	
1808	文化５	○	○	

西暦	和暦	日記	日記目録	寺社方抜書
1809	文化６	○	○	
1810	文化７	○	○	
1811	文化８	○	○	
1812	文化９		○	○
1813	文化10	○	○	
1814	文化11	○	○	
1815	文化12	○	○	
1816	文化13	○	○	
1817	文化14	○	○	
1818	文化15	○	○	
	文政１			
1819	文政２	○		
1820	文政３	○		
1821	文政４	○		
1822	文政５	○		
1823	文政６	○		
1824	文政７	○		
1825	文政８	○		
1826	文政９		○	
1827	文政10	○	○	
1828	文政11		○	
1829	文政12		○	○
1830	文政13	○	○	
	天保１			
1831	天保２	○	○	
1832	天保３	○	○	
1833	天保４	○		
1834	天保５	○		
1835	天保６	○	○	○
1836	天保７	○	○	
1837	天保８	○	○	
1838	天保９	○	○	
1839	天保10	○		○
1840	天保11	○		
1841	天保12			
1848	弘化５			
	嘉永１			
1849	嘉永２			
1850	嘉永３	○		
1851	嘉永４			○
1852	嘉永５			
1853	嘉永６			
1854	嘉永７			
	安政１			
1855	安政２			
1856	安政３			
1857	安政４	○	○	
1858	安政５		○	
1859	安政６	○	○	○
1860	安政７	○	○	
	万延１			
1861	万延２	○	○	
	文久１			
1862	文久２	○	○	
1863	文久３	○	○	
1864	文久４		○	○
	元治１			
1865	元治２	○	○	
	慶応１			
1866	慶応２	○		
1867	慶応３	○		
1868	慶応４	○		

表２　小城藩日記データベース

和暦	日記目録の記述に基づく
西暦	月日までは検討しない
月	
日	
記事内容	日記目録の記述とおり
日記有無	藩日記の有無
日記№	藩日記がある場合、その請求番号
分類	最大５つまで、内容にかんする分類を付与
人名	官途や通称で記された人物の比定
典拠（著者）	典拠として当該記事を使っている論文などの著者
典拠（タイトル）	同タイトル
典拠（雑誌・図書名）	同掲載雑誌・図書名
典拠（発行元）	掲載雑誌・図書の発行元
典拠（頁）	当該記事を典拠とした記述の頁
典拠（刊行年）	掲載雑誌・図書の刊行年
翻刻（著者）	当該記事の翻刻が掲載されている資料集などの著者
翻刻（タイトル）	同タイトル
翻刻（発行元）	同発行元
翻刻（頁）	当該記事の翻刻が掲載されている頁
翻刻（刊行年）	同刊行年

有無、ある場合にはその請求番号（前述のとおり、将来的には日記の画像閲覧を可能としたい）単純な記事目録なら、ここまでででも十分成立するだろう。

ただそれだと、検索はテキストによるもののみとなってしまう。どんな語句で検索するか、筆者のように実際に佐賀藩を研究しているのであれば比較的容易に思いつくだろうが、前述のように「これから」の方には難しいだろう。たとえば農村のことを検索したいとき、どんな語句がいいだろうか。筆者なら、関係ない記事が紛れることを覚悟して「村」とするだろうか（人名の「村田…」が多く出てきそうである）。ただ実際に「日記目録」の記事をみると、村名に「村」とつけられていないことも多く、その見落としに気づかないかもしれない。

そのためひとつの手がかりとして、記事ごとに分類を付すことにした。できるだけ細かく、かつひとつの記事に最大５つまで分類を付すことにより、見落としの可能性がより小さくなると考えた。もちろん分類は、それを付す人物の主観であり、かつ膨大な記事量を考えれば複数人で作業することになり、まったく同じ基準で分類していくことは難しいだろう。それでもテキスト検索とあわせて利用することにより、利用者が興味を引く記事が、より多く見つかるのではないだろうか。

次の「人名」も、検索機能を充実させるためのものである。江戸時代の人びと、特に武家の男性は、幼名、通称、官途、実名とさまざまな「名前」を持ち、成長や政治的な立場などにより変化していく。ある人物について調べたいとき、どの「名前」で検索するか。その人物の「名前」をすべて知っていれば漏れることはないだろうが、知らない「名前」で書かれているかもしれない。これまでのデータベース作成作業においても、たとえば佐賀藩三代藩主鍋島綱茂は、「日記目録」では「綱茂」「丹州」「玄梁院」と三とおりの「名前」で登場する。これらは実名・官途・戒名なので思いつきやすいかもしれないが、筆者は「丹後守」はまだしも「丹州」が頭に浮かぶか自信がない。

そのため複数の「名前」で登場する、佐賀藩上級家臣以上の人物やその妻子などについて、それらの「名前」すべてがその人物につながるよう、データを集積している。さらにその人物の祖父母・父母・配偶者・子供のデータも付加することにより、その人物の「関連人物」が一覧できるよう工夫したいと考えている。

最後に「典拠」「翻刻」の項目だが、その記事を典拠としている図書・論

文や、翻刻を掲載している資料集などが一覧できるようにしている。利用者が興味をもった記事がどのような研究でこれまで利用されているか、資料集などで翻刻があるか、が一目でわかれば、「小城藩日記」の研究利用を促進する一助となろう。

三　データベースの課題

以上、「小城藩日記」の研究利用を促し、さらには佐賀（藩）研究へすすむことを期待し、作成をすすめている本データベースだが、課題としては、やはり膨大な作業量である。現在「日記目録」の翻刻をすすめ、享保五年（一七二〇）の途中まで済んでいるが、記事数は五千を超えている。「日記目録」全体で、数万件におよぶだろう。翻刻を依頼する人員、そのための予算の確保が重要となる。また表1には、日記から寺院・神社関係の記事を抜き出した史料である「寺社方抜書」の項をもうけている。日記はないが「寺社方抜書」はある、という年が何年かあるため、その記事が「寺社方抜書」に抜き出されていないか、もデータベースに表示したい。

作業面では、前述の分類・人名の整理がやはり大変な作業量である。今のところ筆者が手作業で行っているが、遅々としてすすまない。そのため情報処理を専門としている方に依頼し、こうした作業を機械的に行えないか、プログラミングを試みている。

分類・人名整理をせず、ほかの機能のみでデータベースを構成することが手っ取り早いことは理解しているが、できるだけ検索機能を充実させ、より利用者が便利よく使えるものにしたい。このデータベースを入口に、次は佐賀県立図書館の古文書データベース、さらには佐賀に来て史料調査をおこなう研究者が多く現れるよう、地域の大学・研究機関としてつとめていきたい。

おわりに

本データベースは、試験版をまず国立歴史民俗博物館のデータベースシステムを用いて公開する予定である。同館の総合資料学研究プロジェクトに基づく多大な支援により、本データベースの作業は成り立っている。将来的にはセンター独自のシステムを開発し、独自サーバーでの運用をめざしているが（国立歴史民俗博物館と並列）、費用面などを考えると、本センターのような小さな組織では一朝一夕にはいかない。同館がセンターのように自力でのデータベース開発・運用が難しい機関を支援すれば、今後多くのデータベースが公開されるだろうし、同館を媒介として、全国のさまざまな機関が保有する歴史資料データが接続することになる。同館との連携を深めることにより、本データベースの完成・進化を目指していきたい。

【註】

（1）「佐賀藩における紙幣発行―「米筈」を例に」（『佐賀大学経済論集』四五（六）、二〇一三年）。

（2）「幕末佐賀藩の小銃調達と「拝領買」（伊藤昭弘編『佐賀学Ⅲ』海鳥社、二〇一七年）。